否定表現に関わる動的プロセスと価値判断について

― 日本語の否定接頭辞を中心に ―

久保 圭
京都大学大学院
antshavenoborder@gmail.com

1. はじめに

本研究では、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語における否定表現、とりわけ、日本語の否定接頭辞である「不-」「非-」「未-」「脱-」[1] を用いた否定表現について考察する。

従来の否定接頭辞研究 [2] においては、ある否定接頭辞に後続する語基の分類について主に議論されており、その分類とは、語基の品詞に着目したものであった。しかしながら、この品詞による分類法に基づいた説明のみでは捉えきれない側面があることは事実である。そこで、本研究においては、語基の品詞に着目するのではなく、語基があらわす事態と価値判断の有無について着目し、Langacker (1987) の動的プロセスの概念と、有光 (2006) の価値的否定性の概念を用いて、各否定接頭辞を分析する。

本研究の目的は、語基のあらわす事態が、時間軸に沿って展開する動的なプロセスを持つものであるか否か、また、語基が肯定的もしくは否定的な価値を有しているか否かという、二つの観点からのアプローチを試みることで、従来の否定接頭辞研究に対して新たな分類の方法を提示することである。また、その分類に基づき、各否定接頭辞表現の用法と意味についても考察する。

本稿では、まず 2 節において、本研究の分析に関わる重要な道具立てとなる Langacker (1987) における動的事態 (PROCESS) と静的事態 (STATIVE RELATION) の概念について、そして、有光 (2006) における、対比の概念に基づいて否定性を分類した価値的否定性 [3] の概念について概観する。そして 3 節においては、日本語の否定接頭辞についての分析をおこなう。まず「未-」と「不-」を比較することによって、否定表現に関わる動的プロセスについて考察する。次に「不-」と「非-」を比較することにより、否定表現に関わる価値判断について考察する。また、その考察を裏付ける分析として、否定接頭辞を用いた二重否定表現「不非-」と「非不-」の使用傾向とその動機付けについて述べる。そして最後に「未-」と性質が類似した表現である「脱-」を比較することによって、それらの用法の違いについて価値判断の観点から分析し、その認知的動機付けについても考察する。4 節では、分析によって得られた結果を、従来の否定接頭辞研究に照らし合わせることで、否定接頭辞研究における本研究の位置付けを明確化する。そして 5 節において、本研究における今後の展望と課題について述べる。

©久保 圭、「否定表現に関わる動的プロセスと価値判断について」
『言語科学論集』、第 16 号（2010）、pp. 57-77.

2. 動的プロセスと価値的否定性

本節では、本研究における分析の主な道具立てとなる概念である、動的プロセスと価値的否定性について概観する。動的プロセスの概念についてはLangacker (1987) から、価値的否定性の概念については、有光 (2006) からそれぞれ引用する。

2.1 動的プロセス

Langacker (1987) では、複数の存在 (entity) の間に成立する関係について、その二つを直線で結ぶことによってあらわしている。また、その関係が、動的なプロセスによって特徴づけられる場合には、矢印（右図の下部）を用いることによって時間軸を示し、それに沿って動的に展開していくことをあらわした。

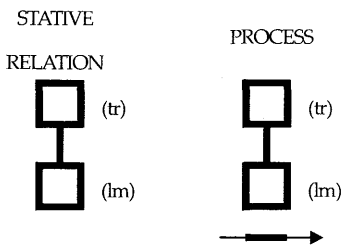

図1：静的事態と動的事態 (Langacker 1987: 220)

図1は、複数の存在 (entity) が関係 (relation) によって成立していることを示している。左側の図は、静的な事態 (STATIVE RELATION) をあらわしており、右側の図は、動的なプロセス（太線の矢印）によって特徴付けられた動的な事態 (PROCESS) をあらわしており、太線であらわされた矢印によって、時間的な展開がプロファイルされていることを示している。

2.2 価値的否定性

有光 (2006) では、対比の概念に根ざした否定性を「価値的否定性」と「対象依存的否定性」[4] の二つに分類して考察している。以下に、価値的否定性についての説明を引用する。

> 価値的否定性とは、語それ自体が、否定的な意味（否定的価値）を有している事例のことである。その語が、その語以外の他の構成要素と組み合わさったり、文の一部となることのない段階で、すでに否定的な意味を有している。名詞の場合、動詞の場合、形容詞・副詞の場合等、様々な場合を

想定できる。

（有光 2006: 51）

価値的否定性を有している事例には、以下のようなものがある（以下に挙げている例は、すべて有光（2006: 53-54）からの抜粋）。なお、丸括弧内は、その対比となる語である。

名詞： 死（生）、病（健康）、善（悪）、心配（安心）、地獄（天国）
動詞： 死ぬ（生きる）、負ける（勝つ）、失う（得る）、憎む（愛する）
形容詞： 悪い（良い）、誤った（正しい）、難しい（簡単な）、苦手な（得意な）
副詞： のらくら（せっせと）、のんびり（あくせく）、くどい（あっさり）

3. 分析

本節では、前節で紹介した「動的プロセス」と「価値的否定性」の概念に基づいて、日本語の否定接頭辞である「不-」「非-」「未-」「脱-」の分析をおこなう。まず、「未-」と「不-」を比較して分析をおこなうことで、動的プロセスの有無について確認する。次に、価値判断の有無について、「不-」と「非-」を比較して分析をおこなう。また、その分析結果に基づいて、日本語の否定接頭辞を用いた新規的表現である「不非-」と「非不-」という二重否定表現について考察する。最後に、動的プロセスと価値判断の両方に関わる接頭辞である「未-」と「脱-」を比較して分析をおこなうことで、その用法の違いが認知的動機付けに基づくものであることを示す。

3.1 分析Ⅰ：「未-」と「不-」 ― 動的プロセスの観点から ―

本節では、日本語の否定接頭辞「未-」と「不-」について、動的プロセスの観点から分析する。

この二つの否定接頭辞は、価値判断に関わっているという点においては類似したものであるといえる。しかしながら、「未-」に後続する語基が動的な事態をあらわすものであるのに対して、「不-」に後続する語基は静的な事態をあらわすものであり、両者はこの点において大きく異なる。

本節においては、この二つの否定接頭辞を比較することによって、否定表現に関わる動的なプロセスの存在の有無について分析し、また、その動的なプロセスの有無によって、「未-」と「不-」の用法の違いが動機付けられていることを示す。

3.1.1 「未-」と「不-」の概観

本節では、日本語の否定接頭辞である「未-」と「不-」について概観する。

筆者は、久保 (2010) において、日本語の否定接頭辞である「未-」の基本的意味を「過去から現在

までにおいて、ある状態が期待されるべき状態にまで達成されていないが、未来においては達成の可能性がある」として提示した。そして、「未X」という表現は「まだXしていない」という表現にパラフレーズがほぼ可能であることから、「未」の意味が時間の進展、つまり動的プロセスに関わっているものであることを主張した。また、日本語の否定接頭辞である「不-」に後続する語基の多くが、段階性を持つものであることから、その基本的意味を「ある状態が望ましい基準にまで達していない」であるとした。

次節では、具体的な事例を用いて、「未-」と「不-」の分析をおこなう。

3.1.2 「未-」と「不-」の事例分析

本節では、具体事例の分析から、「未-」が動的プロセスに関わるものであり、「不-」が動的プロセスには関わらないものであることを示す。

まず、「未-」の事例には以下のようなものがある。

(1) a. この問題は未解決だ。
b. この論文は未完成だ。
c. この映画は未公開だ。
d. 彼は未成年だ。
e. 机に未提出のレポートが置いてある。

また、(1) の例は、以下のようにパラフレーズが可能である。

(2) a. この問題はまだ解決していない。
b. この論文はまだ完成していない。
c. この映画はまだ公開していない。
d. 彼はまだ成年していない。
e. 机にまだ提出していないレポートが置いてある。

以上のように、「未X」という表現は「まだXしていない」という表現にパラフレーズがほぼ可能である。ここでパラフレーズとして用いられている「まだ」は、時間の進展とともに推移・変化することが前提とされる表現である。よって、「未X」は、「まだXしていない」状態から、「Xする」状態に変化していく状態をあらわしており、時間の進展、つまり動的プロセスに関わる否定接頭辞であることがわかる。

次に、「不-」の事例には以下のようなものがある。

(3) a. 彼は不健康な生活を送っている。
b. 彼は不幸だ。
c. この会社は対応が不誠実だ。
d. 私は数学が不得意だ。
e. テストの結果は不満足なものだった。

(3) の例において「不-」に後続する語基は段階性を持つ。以下の例からもそれは明らかである。

(4) 彼は幸せでも不幸でもない。

上の例は、幸せでも不幸でもない、中間的な段階が存在することを示している。つまり、「不X」という表現があらわしているのは、現状がある基準 (norm) を下回っているという状態である。ただし、あくまで「不-」は現状についてのみを表現する否定接頭辞であり、未来へと推移するにつれて、現状がどのように変化していくのかについては含意されていないため、「不-」は動的プロセスには関わらない否定接頭辞である。

3.1.3 まとめ

本節の分析により、「未-」が時間軸に沿って展開していく事態をあらわす語基を後続させることから、動的プロセスに関わる否定接頭辞であることがわかった。また、「不-」はその時点のみにおける状態をあらわす表現であり、動的プロセスには関わらない否定接頭辞であることを、事例を分析することで示した。

以下の図は、日本語の否定接頭辞「未-」と「不-」の認知図式を試験的に描いたものである。

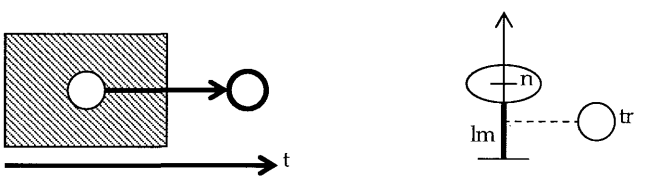

図2：「未-」と「不-」

左側が「未-」についての図式であり、「未X」の状態から「X」の状態へと時間軸[5]に沿って変化していく様子をあらわしたものである。つまり、ボックス内の斜線が「X していない」という否定の状態をあらわしており、時間的な展開によって、ある事態がボックスの外へと移動することで「X して

いる」状態へと変化していくことをあらわしている。また、右側は「不-」についての図式であり、ある対象のその時点での状態が、ある基準 (norm) を下回る部分に位置づけられている様子をあらわした。図中の tr はトラジェクター、lm はランドマーク、n はノルムをそれぞれあらわしている。図式に関するさらなる詳細については、論の展開に沿って、次節以降で説明をくわえていく。

また、「未-」と「不-」に関する価値判断の観点からの分析は、次節以降でおこなう。

3.2 分析Ⅱ：「不-」と「非-」 — 価値判断の観点から —

本節では、日本語の否定接頭辞である「不-」と「非-」について、価値判断の観点からの分析をおこなう。

この二つの否定接頭辞は、動的なプロセスに関わらないという点においては類似したものであるといえるが、当然その用法は異なっている。この用法の違いは、「不-」に後続する語基が、価値判断の観点において肯定的な価値を持つものであることに対して、「非-」に後続する語基には、肯定的あるいは否定的な価値が伴わないものであることに動機付けられている。本節でおこなう比較分析によって、「不-」と「非-」の用法と意味が、価値判断に関わっているか否かによって区別されているということを示唆する。

3.2.1 「不-」と「非-」の概観

本節では、日本語の否定接頭辞である「不-」と「非-」について概観する。

3.1.1 節でも触れたように、筆者は、久保 (2010) において、日本語の否定接頭辞である「不-」の基本的意味が「ある状態が望ましい基準まで達していない」であることを提示した。この「望ましい事態」とは、我々の価値判断に基づいて決定されるものである。また、日本語の否定接頭辞である「非-」の基本的意味が「ある対象が、該当するカテゴリーに属していない」であることを提示し、その語基が矛盾概念[6]を持つものである必要があることを示した。

次節では、「不-」が価値判断に関わる否定接頭辞であり、「非-」が価値判断に関わらない否定接頭辞であることを、具体事例を用いて示す。

3.2.2 「不-」と「非-」の事例分析

本節では、具体事例の分析を通して、「不-」と「非-」について、前節で述べたことを示す。

まず、「不-」について分析をおこなう。以下の例文は (3) の再掲である。

(5) a. 彼は<u>不健康</u>な生活を送っている。
　　b. 彼は<u>不幸</u>だ。
　　c. この会社は対応が<u>不誠実</u>だ。

d. 私は数学が不得意だ。

e. テストの結果は不満足なものだった。

例えば、(5e) の「不満足」という表現においては、「何かに満足すること」が我々の価値判断にとっては望ましいことであるが、ある時点において、その基準にまで達していない状態をあらわしている。よって、「満足」という語には肯定的な価値が含まれていると考えられる。これと同様に、「健康であること」「幸せであること」「誠実であること」「得意であること」は、我々の価値判断において肯定的な価値を持っている。本稿においては、この肯定的な価値のことを、有光 (2006) の価値的否定性にならって「価値的肯定性」と呼ぶことにする。つまり、「不-」に後続する語基は、価値的肯定性を持つものである必要があり、「不-」は価値判断に関わる否定接頭辞であるということができる。

次に、「非-」について分析をおこなう。「非-」の事例には、以下のようなものがある。

(6) a. 非会員の方は入室できません。

b. この物質は非金属だ。

c. 彼は非現実の世界を好む。

d. この図形は左右が非対称だ。

e. パスタは非日本食でしょう。

(6) において、「非-」は「あるカテゴリーに属している／属していない」を区分する、カテゴリーの否定に関わる否定接頭辞であることがわかる。そして、その語基は矛盾概念を持つものである必要がある。そのことは以下の例からも明らかである。

(7) *私は会員でも非会員でもない。

「非会員」という表現において、「非-」によって区分されているのは、「会員である／ない」のいわば「会員カテゴリー」である。上の例から明らかなように、「会員であり、非会員である」ということはあり得ないため、「会員」と「非会員」は互いに矛盾関係にある。このことは、「金属」「現実」「対称」「日本食」などについても同様のことがいえる。よって、「非-」はカテゴリーに関わるシンプルな否定の意味を持つ否定接頭辞であり、前述した「不-」のように、語基が矛盾概念を持つものであることを必須条件とするが、価値判断に関わる条件は求めない。

3.2.3 日本語の否定接頭辞を用いた二重否定表現について

本節では、前節で示した「不-」と「非-」が語基に求める条件の妥当性について、否定接頭辞を用

いた二重否定表現である「不非-」と「非不-」という新規的表現を分析することによって考察する。

日本語の否定接頭辞を重ねて作られている「非不-」という表現は、ウェブ上においては当然のように存在するが、ウェブ以外の書きことばにおいてはまったくといってよいほどあらわれないものである。[7] そこで、「非-」と「不-」を入れ替えた表現である「不非-」の事例についてもウェブで調べてみたところ、「不非-」と「非不-」の使用頻度には明らかな偏りが確認された。

ここまでにおいて、生じる問題は二つある。この使用頻度の偏りを動機付けているものは何かという問題と、なぜこのような表現がウェブ以前の書きことばでは用いられていなかったのかという問題である。本稿では、前者の問題について考察し、前節で述べた「不-」と「非-」に後続する語基の条件についての妥当性について検討する。[8]

3.2.3.1 「不非-」と「非不-」の使用傾向

本節では、ウェブ上から収集[9]した「不非-」と「非不-」の使用の傾向について確認する。

以下の表は、「不非-」と「非不-」の検索結果についてまとめたものである。[10]

表1：「不非-」と「非不-」の検索結果（※ 小数点第二位以下は切り捨て）

	ヒットした事例数	検索した事例数	割合 (%)
「不非-」	0	87	0%
「非不-」	26	233	9.3%

表1からもわかるように、日本語の否定接頭辞を用いた二重否定表現である「不非-」と「非不-」の使用には大きな偏りがある。「不非-」については、ウェブ検索においてヒットする事例が一つもなかった。[11] 「非不-」についても、ヒットした事例数は検索した事例数の一割弱ではあるが、これは、当該表現が新規表現であること、そして、使用される文脈が極めて特殊であること[12]などが、なかなか事例がヒットしない理由として挙げられる。

3.2.3.2 具体事例とその特徴

本節では、「非不-」について、具体的な使用例を挙げて分析する。以下に挙げているのは、収集した事例の一部である。なお、本節の例文中における文脈についての説明と下線は、すべて筆者によるものである。

(8)　料理レベルが高いから非・不器用だよ。

(http://mimizum.com/log/2ch/charaneta/1141217527/)

(9) （医師国家試験対策について）みんな非不合格だといいねえ。

(http://unkar.org/r/doctor/1265561435)

(10) （ある漫画のシナリオがわかりにくいという意見に対して）

単行本になったときに初めてシナリオの流れがくっきり見えてくるタイプの漫画だと思っていますので（実際話の流れとしてはいたって非不自然ですから・・・話飛んでるから分かりにくいところあるけど）全然気になりません。

(http://www.ruce.net/database.cgi?tid=report&did=report&keys1=21)

(11) （社会空間としての mixi の特徴について）[13]

mixi は個人情報の内容や公開度を操作でき、それによって、非「不特定多数」、つまり特定可能な多数からなる社会空間を形成している。

(http://www.beatiii.jp/seminar/028.html)

(12) （「買占め」と「転売」について）

「転売」という集団にとって“非”不利益な行為が「買占め」という集団にとっては不利益である行為と混同されるのは私個人として耐え難いことであり、「転売」をなさっている方々に対してかなり失礼な事ではないかと思い、こうしてコメントさせて頂きました。

(http://ninehalt.blog4.fc2.com/?mode=m&no=461&m2=res&page=1)

以上の例から、「非不-」という表現を、明らかに二重否定の意味で用いていることが文脈から推測される。用いられている文脈に関する特徴としては、「非不X」という表現の意味するものが読み手に伝わるように、「不Xではない」と直後に言い換えてみたり、文脈内で「不X」と対比させる形で用いられたりする場合が多いことなどが挙げられる。

また、使用傾向から観察される事実のなかで最も興味深いのは、「非-」が「不 X」という、すでに否定されているものをさらに否定できる、つまり、「非不X」の形をとることで、二重否定をあらわすことができるのに対して、「不-」は否定されたものに重ねて否定することができない、つまり、「不非X」の形で使用することができないということである。

本稿では、この使用傾向から観察される特徴の背後には、日本語の否定接頭辞「不-」と「非-」の用法が関わっていると考える。次節では、この二重否定をめぐる問題について考察する。

3.2.3.3 考察

本節では、前述した「不-」と「非-」の語基の条件を踏まえて、二重否定表現である「不非-」が使

用されず、「非不-」が使用されるという傾向の動機付けについて考察する。

まず、なぜ「不非-」が使用されないのかについて考察する。前述した通り、「不-」は、後続する語基の多くが価値的肯定性を持つ、価値判断に関わる否定接頭辞である。

よって、「不非 X」という表現が用いられるためには、「非 X」のあらわすものが肯定的な価値を持っている必要がある。しかしながら、「非 X」という表現は、「あるカテゴリーに属していない」という状態のみをあらわすものであるため、その意味は価値判断に関わるものではない。そのため、「非X」は「不-」に後続することが困難な形式であり、その結果として、「不非-」という表現が生じにくいのだと考えられる。

次に、なぜ「非不-」が用いられるかについて考察する。前述の通り、「非-」は、カテゴリーの否定に関わる否定の意味を持つ接頭辞であり、「不-」とは異なり、後続する語基に価値判断の要素を必要とはせず、あるカテゴリーの内と外を区分する機能のみを持っている。

そのため、「非不 X」という表現が用いられるために、「不 X」が価値判断に関する何らかの要素を持っている必要はない。このことによって、「非-」が「不 X」を後続させることが比較的容易になっていると考えられる。よって、「非不X」は、「不X というカテゴリーに属していない」という意味で用いることが可能であり、この表現が持つ意味は、明らかに二重否定をあらわすものである。

3.2.4 まとめ

本節においては、「不-」と「非-」について、価値判断の観点から考察した。「不-」に後続する語基の多くは価値的肯定性を持っており、価値判断に関わる否定接頭辞であることを示した。それに対して、「非-」は、その語基が矛盾概念を持つものであることから、カテゴリーの区分のみに関わる否定接頭辞であり、価値判断には関わっていないことを示した。また、上記で示した点について、新規的な表現である「不非-」と「非不-」の使用傾向の偏りを分析し、その動機付けについて考察することで、その妥当性について述べた。以下の図は、日本語の否定接頭辞「不-」と「非-」について、認知図式を用いて試験的に描いたものである。

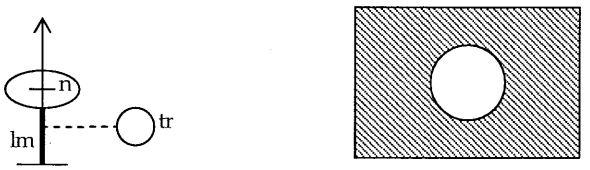

図3：「不-」と「非-」

左側の図が「不-」についての図式である。図中において、上方向に向かって伸びている矢印は、望

ましさのスケールをあらわしており、そのなかで、ある事態の現状（tr）が基準（norm）を下回った部分に位置づけられていることを示している。当然、基準よりも上の部分は「価値判断において望ましい程度」をあらわしている。また、右側の図は「非-」についての図式である。この図は、論理学における否定（論理否定）をあらわすベン図 (Venn diagram) とその様相と同じくする。長方形の内部に位置する円の円周が示しているのは、カテゴリーの区分であり、その内側の白い部分は、カテゴリーに属していることを示し、外側の斜線部分は、カテゴリーに属していないことを示している。最もシンプルな否定をあらわしているこの図には、カテゴリーの内と外に関する以外の情報は示されていない。もちろん、価値判断に関する要素も、この図には盛り込まれていない。

3.3 分析Ⅲ：「未」と「脱」 ― 価値判断の観点から ―

本節では、日本語の否定接頭辞である「未-」と「脱-」について、価値判断の観点から考察する。

まず、「脱」という漢字は、「脱出」や「脱獄」という語からもわかるように、移動の意味が語に含まれていると考えられる。移動という行為は、瞬間的に起こる性質のものではなく、ある地点からある地点へ、時間軸上に沿って展開していく動的な行為である。よって、「脱-」は動的プロセスに関わる否定接頭辞であると考えることが可能であり、その点において、「脱-」は「未-」と類似している。しかしながら、この二つの用法には明らかな違いがある。

この用法の異なりについて、本節では価値判断の観点から分析をおこない、その動機付けについて探る。まず事例を分析し、「未-」に後続する語基が価値的肯定性を持つものであるのに対して、「脱-」に後続する語基は価値的否定性を持つものであることを示す。

3.3.1 「未-」と「脱-」の概観

本節では、日本語の否定接頭辞である「未-」と「脱-」について概観する。

前節で触れたように、久保 (2010) では、日本語の否定接頭辞である「未-」の基本的意味を「過去から現在までにおいて、ある状態が期待されるべき状態にまで達成されていないが、未来においては達成の可能性がある」であることを提示した。また、「未 X」という表現は「まだ X していない」という表現にパラフレーズがほぼ可能であることから、「未」の意味が時間の進展、つまり動的プロセスに関わっているものであることを主張した。

なお、日本語の否定接頭辞「脱-」に関する先行研究は、管見の限りにおいてない。

3.3.2 「未-」と「脱-」の事例分析

本節では、「未-」と「脱-」の具体事例を分析することで、前節において述べたことを示す。

まず「未-」について、次に「脱-」について、価値判断の観点から分析をおこなう。そして、両者

を比較することで、どのような点で異なりがあるのかについて、それぞれの認知図式も交えて考察をおこなう。

3.1.2 節では、「未-」について動的プロセスの観点から分析をおこなったが、本節では、新たに価値判断の観点から「未-」の事例を分析する。以下に挙げる例は、(1) の再掲である。

(13) a. この問題は未解決だ。
b. この論文は未完成だ。
c. この映画は未公開だ。
d. 彼は未成年だ。
e. 机に未提出のレポートが置いてある。

以上の例から明らかなことは、「未-」の語基になり得る語は、我々の価値判断にとって、その事態が達成されることが望ましいとされる、いわゆる価値的肯定性を持つものであり、動的プロセス上における着点をあらわしている必要があるということである。

例えば、「未完成」は「ある事態が完成すること、あるいは、ある事態を完成させること」が我々の価値判断においては望ましいことであるが、まだそこに達していないという状態をあらわしている。また、その語基である「完成」は、事態が達成される着点をあらわしている。つまり、ある事態が開始すると同時に、時間軸に沿って、ある対象が望ましくない状態から、望ましい状態へと近づいていく動きが展開されていくとき、「未-」の語基があらわすものは、その動的なプロセスの着点に位置づけられるものであると考えられる。

次に、「脱-」の事例には、以下のようなものがある。[14]

(14) 脱オタク、脱温暖化、脱カルト、脱高血圧、脱サラリーマン（脱サラ）、脱どん底、脱ニート、脱パソコン初心者、脱貧困、脱三日ぼうず、脱メタボリック、など

否定接頭辞の「脱-」に関する事例は、新規的な表現が多い事が大きな特徴として挙げられる。これらの事例から、「脱-」の語基になり得る語は、我々の価値判断にとって、望ましくない事態をあらわすものであることがわかる。つまり、「脱-」に後続する語基には、否定的な価値を持つもの、つまり、価値的否定性を持つものであることがわかる。

同時に、「脱-」の語基があらわすものは、動的プロセスの起点をあらわしていることがわかる。例えば、「脱温暖化」は、「温暖化が起こっている状態、もしくは、それが懸念されるような状態」が我々の価値判断において望ましくないことであるが、その状態から、そうではない状態、つまり望ましい状態へと、時間軸上に沿って変化していくことをあらわしている。また、語基である「温暖化」は、状態の変化における起点をあらわしている。

つまり、「脱-」の語基があらわす事態は、ある事態が開始すると同時に、時間軸に沿って、ある対象が望ましくない状態から、望ましい状態へと変化していく様子が展開されていくときに、その動的なプロセスの起点として位置づけられるものであると考えることができる。

3.3.3 まとめ

本節では、日本語の否定接頭辞である「未-」と「脱-」の語基について分析し、「未-」に後続する語基が肯定的な価値（価値的肯定性）を持つものであるのに対して、「脱-」に後続する語基が否定的な価値（価値的否定性）を持つものであることを示した。

両者は、我々の価値判断にとって望ましくない状態から、望ましい状態へと時間軸に沿って変化していくという点においては類似した表現であるといえるが、「未-」が「望ましい状態に近付く移動」が強調された表現であるのに対して、「脱-」は「望ましくない状態から遠ざかる移動」を強調した表現であることがわかる。以下の図は、日本語の否定接頭辞「未-」と「不-」について、認知図式を用いて試験的に描いたものである。

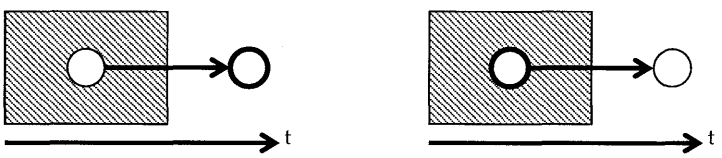

図4：「未-」と「脱-」

両方の図式に共通しているのは、ある対象が望ましくない状態（斜線部分は否定的な領域をあらわしている）から、望ましい状態への変化が、時間軸上に沿って展開されているという点である。よって、「未-」と「脱-」は図式の上で同じベースを持っているということになるが、焦点の当たっている部分（太線であらわされた部分）は異なっている。[15]

つまり、「未-」が着点までの移動に焦点が当てられた否定接頭辞であるのに対して、「脱-」は起点からの移動に焦点が当てられた否定接頭辞であることがわかる。さらに言えば、「未-」と「脱-」の用法と意味の違いは、この異なる部分に焦点が当てられているという認知的動機付けによって生じていると考えられる。

4. 従来の否定接頭辞研究の再検討と本研究による示唆

前節まで、日本語の否定接頭辞「不-」「非-」「未-」「脱-」について、動的プロセスと価値判断の観点から分析をおこなってきた。本節では、本研究のアプローチが、従来の否定接頭辞研究の枠組みに

どのような示唆を与えるかについて述べる。

従来の日本語の否定接頭辞に関する形態論的研究は、該当する接頭辞に後続する語基の分類について論じたものが主であった。それらの研究は、品詞を基準とした語基の分類を提示してきた。そのような先行研究の代表として、本稿では、影山 (1993) からの引用を以下に挙げる。なお、都合上、引用内における例文番号は、本稿に沿った番号に置き換えた。

> ... また形態論的な観点からは，例えば否定を意味する「不-」が名詞と形容名詞に付くが純粋な形容詞と動詞には付かないことが指摘できる。
>
> (15) a. 不+名詞： 不人気，不都合，不規則，不道徳，不人情，不注意，不手際，不機嫌，不出来，不心得，不行儀，不謹慎，不体裁，不見識，不釣合い，不似合い，不本意，不品行，不義理，不仲，不快，不慣れ
>
> b. 不+形容名詞： 不愉快，不可能，不相応，不自然，不活発，不満足，不平等，不必要，不明瞭，不鮮明，不透明，不確実，不名誉，不真面目，不健康，不完全，不確か
>
> c. 不+形容詞： *不うまい，*不かしこい，*不えらい，*不重い，*不楽しい
>
> d. 不+動詞： *不合う，*不慣れる，*不行う，*不似合う
>
> 「不」による接辞化は完全に生産的ではないから，名詞ないし形容名詞であっても，「倫理」に対する「*不倫理な」や「元気な」に対する「*不元気な」のように実在しない語が多くある。しかし (15a，b) の例に鑑みると，このような例は，実在はしないものの可能な語として認めるべきであると思われる。（中略）おそらく，両者に共通するのは名詞性という特徴であり，「不-」は名詞性を備えた範疇を選択するものと考えられる。
>
> （影山 1993: 24）

以上において、影山 (1993) は日本語の否定接頭辞「不-」に後続する語基について、品詞という観点からその分類をおこなっている。しかしながら、品詞のみに頼ったアプローチでは、その大まかな傾向をある程度まで説明してはいるが、語基の分類という大きな問題を十分には捉えきれていないように思われる。つまり、「不-」の語基の分類として提示されている「不+名詞」と「不+形容名詞」という結論は、少し漠然としたものであるということである。では、この分類に従い、「自動車」という名詞を「不-」に後続させて「不自動車」という表現として使用することができるだろうか。また、「巨大」という形容名詞を後続させた表現である「不巨大」も、上記の引用において認めるべき事例

であるとされている「不倫理」や「不元気」と比較しても、容認度がずいぶん下がるように思われるが、このような表現まで「可能なもの」として認めてもよいのだろうか。

影山 (1993) にみられるような、品詞による否定接頭辞の語基の分類は、「不-」が名詞や形容名詞とは結合しやすく、形容詞や動詞とは結合しにくいという大まかな傾向までは捉えている。しかしながら、名詞や形容名詞であれば、どのような語とも結合するわけではないことは明らかである。品詞による分類において「可能である」とされる表現のなかにも、容易に認められるものと認めることが困難なものとがある。この事実を考慮すれば、「不-」の事例の容認度は、品詞とはまた別のパラメータとの相関によるグレイディエンスのなかで規定されていると考えるほうが妥当である。

本研究では、動的プロセスや価値判断の観点から否定接頭辞を分析した。そして、「不-」においては、後続する語基の多くが価値的肯定性を持つものであることを示した。これは、従来の否定接頭辞研究における、品詞を基準とした分類によって得られた語基の傾向に対して、さらに細やかな分類の可能性を示唆するものである。また、「不元気」などの「不-」を用いた新規的な表現についても、ただ「分類上は可能であるため認める」とするのではなく、「不元気」などの認めやすい事例と、「不自動車」などの認めにくい事例との、容認度の差が生まれる動機付けについて考察することが、否定接頭辞研究における方向性として健全であると思われる。本研究でおこなった、動的プロセスや価値判断からのアプローチは、その動機付けの解明に向けて一石を投じるものである。

5. おわりに

本稿では、日常言語の否定表現、とりわけ、日本語の否定接頭辞である「不-」「非-」「未-」「脱-」について、Langacker (1987) における動的プロセスの概念と、有光 (2006) における価値的否定性の概念を用いて分析をおこなった。2 節において、これらの概念について概観し、3 節では、各否定接頭辞を比較する形式で分析をおこなった。

まず、「未-」と「不-」をそれぞれ分析して比較することで、否定接頭辞に関わる動的プロセスの有無について述べた。「未-」に後続する語基が、時間軸上で展開される、つまり動的プロセスに関わる事態をあらわすものであり、時間の推移とともに、やがて達成される可能性が前提として含意されているということを示唆した。それに対して、「不-」はその時点における状態が基準以下であることを意味する否定接頭辞であり、未来における達成は含意されず、また動的プロセスに関わらないものであることを示した。

次に、「不-」と「非-」をそれぞれ分析して比較することで、否定接頭辞に関わる価値判断の有無について述べた。事例分析において、「不-」に後続する語基の多くが、我々の価値判断において望ましいとされる、いわゆる価値的肯定性を持つものであることを示した。それに対して、「非-」はカテゴリーの区分に関わる否定接頭辞であり、後続する語基は矛盾概念である必要はあるが、価値判断に関わるものである必要はないということを述べた。また、この「不-」と「非-」の分析結果の妥当性を

裏付けるために、「不非-」と「非不-」という、日本語の否定接頭辞を用いた二重否定表現に関する分析をおこなった。これらの表現はウェブ上においてのみ確認できる事例であるが、その使用傾向には大きな違いがある。「非不-」の使用事例はしばしば確認できるのに対して、「不非-」の使用事例はまったく見つからない。この使用傾向の違いについて考察することで、本研究における「不-」と「非-」の分析結果が妥当であることを示した。

最後に、「未-」と「脱-」をそれぞれ分析して比較をおこなった。この二つの否定接頭辞は、動的プロセスに関わるものであり、また、価値判断にも関わっている。その点において、「未-」と「脱-」は非常に類似した表現であると考えられるが、当然、その用法と意味は異なったものである。本研究では、「未-」と「脱-」がどのような点で異なった表現であるのかについて、価値的肯定性と価値的否定性の観点から考察をおこなった。また、その異なりの背後にある認知的動機付けについても考察をおこなった。3節における以上の分析は、表2のようにまとめることができる。

表2：本稿における分析の概観

	「不-」	「非-」	「未-」	「脱-」
動的プロセス	−	−	+	+
価値判断	+	−	+	+
肯定／否定	positive		positive	negative

表2では、本稿で分析した各否定接頭辞について、動的プロセスや価値判断に関わるものにはプラスで、関わらないものはマイナスで示した。また、価値判断に関わる否定接頭辞については、価値的肯定性 (positive) に関わるものであるか、もしくは価値的否定性 (negative) に関わるものであるかを示してある。

そして4節では、従来の否定接頭辞研究と本研究の違いについて述べた。これまでの否定接頭辞研究では、後続する語基の分類に対して、品詞を判断基準としたアプローチを主に採用してきた。しかしながら、品詞のみによる分類では、語基の大まかな傾向までは捉えることは可能であるが、その品詞に該当するものであれば、どのような語でも語基として容認されるということはないため、まだ分析が粗いことは確かである。本研究では、新規的な表現においても、容認されやすい事例とそうでない事例の判断が可能になるような基準を新たに設けることが必要不可欠であるという立場から、その足掛かりとして動的プロセスの概念と価値的否定性の概念を導入して分析をおこなった。語基のより細やかな特徴を捉えることができるパラメータを設定したという点において、本研究は、従来の否定接頭辞研究に対して、新たな分類基準を提示するものであり、より健全な方向性を持った否定接頭辞研究の可能性を示唆するものである。

しかしながら、本稿の主張のみでは、まだ捉えきれていない事例があることも確かである。各否定接頭辞をより包括的に、より細やかに捉えることのできるパラメータが必要であるように思われるた

め、これを今後の課題としたい。また、その他の日本語の否定接辞に関する分析や、英語の否定接辞の分析、そして、本稿における「不非-」と「非不-」のような、否定接辞をめぐる新規的な表現についても分析をおこないたい。

注

1. 本稿では、日本語の接頭辞である「脱-」が否定接頭辞であるかどうかについて、以下に挙げる二つの基準を設けた。

   【基準 1】語の先頭に位置している。

   【基準 2】「脱 X」が、「非 X 化」にほぼパラフレーズが可能である。

   まず、基準 1 によって、接頭辞であることを確認し、次に、基準 2 によって否定表現に関連があることを確認する。この二つの基準を満たす「脱-」を、本稿では否定接頭辞をみなす。
2. 日本語の否定接頭辞を扱った主な先行研究として、相原 (1986) 、野村 (1973b) 、奥野 (1985) 、サトー他 (1982) 、須山 (1974) 、吉村 (1990) などがある。
3. 有光 (2006) では、対比の概念に根ざした否定性を「価値的否定性」と「対象依存的否定性」の二つに分類して考察しているが、本稿では前者のみを分析の道具立てとして用いる。
4. 有光 (2006) によれば、対象依存的否定性とは、語それ自体が、否定的な意味（否定的価値）を有しているのではなく、対象となる語によって、否定性（否定的価値）を持ったり、持たなかったりする事例を指す。その語がその語以外の他の構成要素と組み合わさったり、文の一部となったりすることによって、否定性（否定的価値）を持ったり、持たなかったりする。
5. 認知図式において、通常、時間軸は t が付いた矢印によってあらわされる。
6. 論理学において、互いに他を否定しあって、その中間に第三者を入れる余地のない概念。
7. 『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版 (1995) 』をコーパスとして用いたが、「不非-」と「非不-」を用いた表現を確認することはできなかった。
8. 後者の問題については、ウェブ上の文章に検閲のシステムがない一方で、書籍が他者による検閲を経て出版されているという事実にその理由があるのではないかと推測されるが、実質的な考察は本稿ではおこなっていないため、今後の課題としたい。
9. 本研究でのウェブ検索は、すべて Google を用いておこなった。なお、検索によって得られたデータから、中国語によって書かれたものと、自動翻訳による日本語の文章を除外した。
10. データの収集は、『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版 (1995) 』をコーパスとして用いておこなった。「不-」と「非-」の事例を収集して得られたのは、「不-」がタイプ数で 233 例、「非-」がタイプ数で 87 例であった。次に、得られた「不-」の事例に「非-」を付け、「非-」の事例には「不-」を付けて、それぞれ「非不-」と「不非-」の形にした上で、そのすべてについてウェブ検索をおこなった。よって、本研究で用いる「不非-」と「非不-」に関するデータは、すべてウ

ェブ上から収集したものである。

11. 表にもある通り、「不非-」の検索ヒット数は0件であった。以下に、ノイズとしてヒットしたものの一部を参考までに紹介しておく。なお、以下の例文中における文脈の説明と下線は、すべて筆者によるものである。

(i) (CDと圧縮データの音質はどちらが上か、という質問に答えて)

ストアで買った物は基本的に圧縮データですからどんだけがんばってもCDクラスの音質には戻りませんね、要は不(非)可逆圧縮と呼ばれるやつです、

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1243156362)

(ii) (小児歯科学の教本の目次から)

不(非)協力的な小児の対処法

(http://www.ishiyaku.co.jp/search/details_1.aspx?cid=1&bookcode=427340)

(iii) (例え話のなかで)

例えば『私の考えでは、「教室で私語が満ちること」は、状況に変化するにつれて、現実になったり不非現実になったりするのだと思います。』なら意味が分かるし、きっとこの意味で書いたのだろう。

(同一人物が次の発言内で)

ああ、すみません。×不非現実 ○非現実

(http://blog.livedoor.jp/dsakai/archives/50619759.html)

12. くだけた場において、ジョークとして使用されることが多い。

13. mixi(ミクシィ)とは、株式会社ミクシィが運営する、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの名称である。

14. 「脱-」の事例の収集は、すべてGoogleによる検索を用いておこなった。

15. 山梨(2000)では、ベース(base)とプロファイル(profile)について、「外部世界の対象の理解は、認知のドメイン(cognitive domain)との関係によって相対的に特徴づけられる。この認知のドメインは、プロファイル(profile)とベース(base)の関係で規定される。プロファイルは、認知のドメインのなかの焦点化されている部分、ベースはプロファイルを際立たせる背景となる部分として機能する(山梨 2000: 20)」と説明している。

参考文献

相原林司. 1986.「不一 無一 非一 未一」『日本語学』5(3): 67-72.

有光奈美. 2000a.「否定性を含む肯定文の諸相 ―認知語用論の観点から」京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.

Arimitsu, Nami. 2000b. A Review on Negation in Positive Sentences. *Papers in Linguistic Science* 6:

41-60.

有光奈美. 2002.「否定的文脈と否定極性項目に関する一考察 ―"not at all" vs.「全然」を中心に―」『言語科学論集』8: 63-80.

有光奈美. 2004.「否定の意味から行為へ：対象依存的否定性と価値的否定性」『日本語用論学会予稿集』7: 9-12.

有光奈美. 2006.「日・英語の対比表現と否定のメカニズム ―認知言語学と語用論の接点」京都大学 人間・環境学研究科 博士論文.

有光奈美. 2007a.「空間概念に基づく英語接辞の認識とイメージスキーマ」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』7: 131-146.

有光奈美. 2007b.「「China-free」を中心とした接辞表現の認知言語学的分析」『東洋大学経営学部 経営論集』70: 105-117.

有光奈美. 2008.「日英語の対比表現に見られる非明示的否定性と量・質・態度に関する変化のメカニズム」, 児玉一宏・小山哲春（編）『言葉と認知のメカニズム 山梨正明教授還暦記念論文集』247-267. 東京：ひつじ書房.

崔春浩. 2004.「"Negation"とカテゴリー認知」『日本語用論学会予稿集』7: 5-8.

Evans, Vyvyan, and Melanie Green. 2006. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

藤田知子. 2007.「現代日本語における接頭辞「カタ（片）―」の意味と用法」『神田外語大学紀要』20: 1-27.

深田智・仲本康一郎. 2008.『概念化と意味の世界』東京：研究社.

原由起子. 1986.「的―中国語との比較から」『日本語学』5(3): 73-80.

Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.

出口雅也. 2004.「"Negation" と"Negative evaluation"」『日本語用論学会予稿集』7: 1-4.

池上嘉彦. 1975.『意味論 ―意味構造の分析と記述』東京：大修館書店.

伊藤たかね・杉岡洋子. 2002.『語の仕組みと語形成』東京：研究社.

ジョン・R. テイラー、瀬戸賢一. 2008.『認知文法のエッセンス』東京：大修館書店.

角岡賢一. 2007.「日本語の否定接頭辞「ぶ」と連濁について」『龍谷大学国際センター研究年報』16: 35-47.

影山太郎. 1993.『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

影山太郎. 2001.『日英対照 動詞の意味と構文』東京：大修館書店.

影山太郎. 2009.『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』東京：大修館書店.

小林賢次. 1968.「否定表現の変遷 ―「あらず」から「なし」への交替現象について」『国語学』75: 45-62.

児玉一宏・野澤元. 2009.『言語習得と用法基盤モデル』東京：研究社.

久保圭. 2010.「日本語の否定接頭辞に関する認知言語学的分析」京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar. Vol. 1,* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, image, and symbol*. Berlin: Walter de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of cognitive grammar. Vol. 2,* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A basic introduction.* Oxford: Oxford University Press.

李貞愛. 2009.「中国語の否定について」『桜美林大学紀要』7: 17-29.

松本曜（編）2003.『認知意味論』東京：大修館書店.

水野義道. 1987.「漢語系接辞の機能」『日本語学』6(2): 60-69.

西川盛雄. 2006.『英語接辞研究』東京：開拓社.

野村雅昭. 1973a.「複次結合語の構造」『国立国語研究所報告』49: 72-93.

野村雅昭. 1973b.「否定の接頭語『無・不・未・非』の用法」『国立国語研究所論集 ことばの研究』4: 31-50.

野村雅昭. 1974a.「三字熟語の構造」『国立国語研究所報告』51: 37-62.

野村雅昭. 1974b.「四字熟語の構造」『国立国語研究所報告』54: 36-80.

野村雅昭. 1978.「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告』61: 102-138.

野村雅昭. 1988.「二字熟語の構造」『日本語学』7(5): 44-55.

太田朗. 1980.『否定の意味 ―意味論序説』東京：大修館書店.

奥野浩子. 1985.「否定接頭辞「無・不・非」の用法についての一考察」『月刊 言語』14(6): 88-93.

佐久間鼎. 1959.『日本語の言語理論』東京：恒星社厚生閣.

サトー アメリア・川崎晶子・ソーニア ロンギ. 1982.「語頭の位置にある否定的な意味をもつ造語要素「無・不・未・非」の意味と使われ方」『日本語と日本文学』2: 1-10.

城田俊. 1998.『日本語形態論』東京：ひつじ書房.

須山奈保子. 1974.「接辞『不』『無』をめぐって」『学習院大学国語国文学会誌』17: 19-28.

鈴木修次. 1978.『漢語と日本人』東京：みすず書房.

丹保健一・倪永明. 2000.「接頭辞「不（ブ）」「無（ブ）」をめぐって」『三重大学教育学部研究紀要』51: 99-107.

田村泰男. 2005.「現代日本語の接頭辞について」『広島大学留学生センター紀要』15: 25-36.

田中雅和. 1993.「和化漢文における否定表現の一考察」『鎌倉時代語研究』16: 77-101.

上原聡・熊代文子. 2007.『音韻・形態のメカニズム』東京：研究社.

山梨正明. 1995.『認知文法論』東京：ひつじ書房.

山梨正明. 2000.『認知言語学原理』東京：くろしお出版.

山梨正明. 2009.『認知構文論 ―文法のゲシュタルト性』東京：大修館書店.

吉村あき子. 1999.『否定極性現象』東京：英宝社.

吉村公宏（編）2003.『認知音韻・形態論』東京：大修館書店.

吉村弓子. 1990.「造語成分「不・無・非」」『日本語学』9(12): 36-44.
鄒善軍. 2005.「日本語の「不」と中国語の「不」 ―接頭辞を中心に―」『人間社会学研究集録』1: 135-147.

辞書

鎌田正・米山寅太郎（著）2001.『漢語新辞典』東京：大修館書店.
佐藤進・濱口富士雄（編）2006.『全訳 漢辞海 第二版』東京：三省堂.
諸橋轍次（著）1989.『大漢和辞典 修訂第二版』東京：大修館書店.

コーパス

新潮社. 1995.『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版』東京：新潮社.